

## 異常態フードシステム論に託されている課題

— 「飢餓」の取り扱いをめぐる —

異常態フードシステム研究所 樋口 貞三

### 1. 意図すること・方針

フードシステム学会はその共通財産とでもいうべき『フードシステム学全集全8巻』（高橋正郎監修）を実現させており、フードシステム学の存在をあらためて世に知らしめた功績は大きい。そのことを改めて確認した上で、そこで取り上げられている「フードシステム」は当報告者の用語を用いるならば「定常態フードシステム」というべきものであり、実は「異常態フードシステム」（注1）に関する適正な取り扱いが欲しかった、という感想をいっている。この事実は意図的な背景とは無縁なものであり、従来食料パニックを中心にそこそこに展開されてきた「異常態フードシステム論」の未成熟さに課すべきものである。本報告は以上のような思いから、フードシステム学会員への問題提起を兼ねながら、異常態フードシステム論における基本用語となるべき「飢餓」について考える。方針として、当報告者が選別した4冊（四種）の「飢餓」感について検討し、異常態フードシステム論としての必要な対応を考察する。世に「飢餓」を論じものの数は無数であるが、説明をはぶきながらその類型化を図るならば①小心者、②学識者、③経験者、④デマゴーガー、⑤宗教筋、そしてこれから触れようとする⑥思考者となる。

### 2. 四種の飢餓感

#### 1) 山折哲雄／芹沢俊介：“淡い飢餓感”（注2）

時代のスピードでいえば新しくはないが、両者の対談の話題となっている『コンビニエンス・マインド』論が極めて新鮮なためである。前者は日本宗教学の権威者、後者は新興宗教などの論評に定評がある。「・・・そういう寂しさみたいなものを、コンビニエンス・ストアに行くと、僕は感ず

るね。それは無機的な寂しさ。店内を見ると何でもあるわけです。だけど、何となく寂しい風が吹いているな、と」（山折）。「そのところをコンビニエンス・マインドというふうに言わざるをえないというのは、そういう淡い、けれども、いつでも寂しい、そう簡単に満たしてくれるのを見いだせない、そういう飢餓感が普遍的にあるからだ」というような気がします」（芹沢）。「僕にとって究極の環境問題は飢餓だと思うんですよ。・・・そうすると早晚、人類は最終的な飢餓の場面を迎えるのではないかと思っているんです」（山折）。

#### 2) S.ヴェーユ：飢えているものへの関与（注3）

第二次対戦でフランスの抵抗運動者となり、夭折の女流哲学者であるが、“考える”若者にはその人気は衰えるところがない。初版はごく古いものであるが、ごく最近新訳の岩波文庫（青帯）に入るようになった。「数千年前、エジプト人は、一つの魂が死後に義とされうるのは、その魂が“わたしはなんびとも飢えの苦しみに放置したことはない”とすることができる場合のみであると考えた。・・・したがって、自分に相手を救ってやる機会がある場合、その人間を飢えの苦しみに放置しないことは、人間に対する永遠の義務の一つである。この義務はこのうえなく自明のものであるから、すべての人間に対する永遠の義務のリストを作成するにあたって、範例となるべきものである」。

#### 3) 丸井英二：飢餓記憶の共同化（注4）

「たしかに、われわれ日本人の多くは近い過去に、強い痛みをともなう飢餓体験をもっている。戦時中そして戦後のかなりの時期にわたって、多くの日本人が飢餓のなかにあった。それゆえにこそ、飢餓を忌避する感情もあり、また飢餓状態にある人々への同情もある。・・・現在のわれわれの食生活は一転し、われわれの視点ははるかに飢餓

から離れてしまっている。・個人記憶のみならず、われわれの記憶のなかに飢餓体験を残すことこそが、再び「食とはなにか」を原点に戻し、食文化を極北から洗い直す作業となるはずである」。

#### 4) O Grada, C. : 伝統的famineの終焉 (注5)

Famine 研究の第一人者である氏の最近作は、わたしにとってショックであった。「悲観主義者はなお今日、より新しい pandemic (鳥ウイルスの人間変種) のほうが famine よりも脅威であると警告する。「おそらく歴史上初めて、アフリカの一部、アフガニスタン、そして北朝鮮などの地球上のわずかな箇所だけが大きな飢饉の脅威にさらされるだけとなっている」。「限定的な核戦争であっても famine の新時代をもたらすことが可能である」(本稿「その他資料」参照)。

### 3. 検討

シモーヌ・ヴェーユの言葉は特定の学問領域を超えた「人間宣言」のように思える。それを単純に「倫理性」要求とするのは容易であるが、フードシステム研究に携わりながら「自分に相手を救ってやる機会がある」今のわれわれは、その専門性を駆使し「飢えているものを放置しない」心がまえについてあらためて学ばなければならないように思う。今飢えているもののみならず、われわれがやるべきことのサボタージュのゆえに、未来の子孫が飢えに放置されることになれば、義人ならぬ悪人の汚名を負うことになる。

「淡い飢餓感」は、危うい要因を孕んでいる。直接的に「飢餓」の回避という切迫さはないが、時間測定不定な遠方に「飢餓」をセットし、それへの自然なおのきとなっている。当報告者の用語では「飢餓不安」であり、食料パニックの誘発剤・増幅剤となる(注6)。

丸井による「飢餓」の記憶化は、阪神・淡路大地震について記された書で、「災害は忘れたころにくるのではなく忘れたためにくる」と喝破し、災害の記憶化を述べていることを想起させられる(注7)。「飢餓」は微妙に抽象的であり、かつ具体的であるが、こうした“記憶化は記録力と喚起力の合成である”という抽象作業を伴うことになり、異常態フードシステム論のひとつの作業とな

る。こうした作業は「淡い飢餓感」を分解する諸刃の剣ともなるが、避けて通れない道である。

famine の最高権威者 O Grada にとって、もはや(伝統的) famine は A Short History として整理されるものとなり、まさにひとつの歴史的区切りについて述べている。しかし、さらに深刻な核テロなどによる“新” famine 時代という指摘に対し、これまでの異常態フードシステム論はまったく無力であると告白せざるをえない。しかし、途方にくれている間を惜しみ、あらたな研究に一步踏み出さなければ、「飢えるものを放置する”ことにおいて同じであるのだろう。かりに“淡い飢餓感”が“より濃い”ものになるとしても。

### 4. 結び

シモーヌ・ヴェーユはことさら、抽象的な「飢餓」よりも「飢えるもの」へのこだわりをみせている。異常態フード「システム」研究への貴重な視点提示であると考えたい。

注1) 異常態フードシステムについては、樋口：「コメからみたフードシステムの脆弱性」(日大国際地域研究所編『農業と生態系：米をめぐる経済学』(龍溪書舎, 2004) など参照。

注2) 山折哲雄/芹沢俊介「マインド・DNA・飢餓」『こころの旅：山折哲雄対談集』(現代書館, 1997)。

なお、『コンビニエンス・マインド』は稲葉小太郎

注3) Simone Weil, “L'enracinement”, Gallimard, 1949, p.13. シモーヌ・ヴェーユ『根をもつこと』(春秋社 1967, 2009, p.25)。岩波文庫で新訳がでた。

注4) 丸井英二「飢餓を考える」(丸井英二編『飢餓』、ドメス出版、1999)。

注5) C.O Grada “Famine: A Short History”, Princeton Univ. Press, 2009, pp.278-282

注6) 樋口前掲注1)参照。

注7) 外岡秀俊『地震と社会(上下)』、みすず書房、1998、下巻最終章「人の安全保障」は圧巻。“忘れたため”、云々は p.738。

◇その他資料：①荏開津典生『「飢餓」と「飽食」』、講談社選書メチエ、1994。

②樋口貞三「現代飢餓論」の序説的展開、食品経済研究、第27号、1999。